

被災地巡検 レポート

私が被災地巡検を通して学んだことをここに記す。

1. 大川小学校

まず訪れたのは大川小学校だ。大川小学校は事前学習をしたこともあり、最も印象に残っている。語り部の佐藤さんは元々中学校教師で、娘を震災で亡くしていた。大川小学校は先生の判断ミスが原因とされている、防災教育の遅れが原因である、と事前学習では学んでいた。

しかし、佐藤さんは「生徒を救いたいと思わない先生はいない」とおっしゃっていた。先生は泣き出す生徒を「大丈夫だ、心配ない」と言うしかなかった。一概に先生が悪いのではなく、事前に逃げるかどうか、どこに逃げるかを決めていなかったことが原因だという佐藤さんの言葉にはっとさせられた。先生方の話し合いで決めた逃げる場所はまさに津波がくる場所で、全員避難させたと思ったらそこから津波が来たという瞬間、先生方はどんなに絶望しただろう。どんなに辛かっただろうと胸が苦しくなった。佐藤さんの娘のみずほちゃんは大川小学校の6年生で即死だったそうだ。即死で体に水を含んでいないため、本当に眠っているように亡くなっていた。何度声をかけてもちっとも起きない。そういう子もいれば、体にいっぱい水を含んで必死に生きようと頑張ったんだなとわかる表情で亡くなっている子や、裸で体が傷だらけで最後まで泳いで生きようとしていたんだなとわかる子もいた。私の大切な人がもしそうだったら人にその経験を伝えることができるだろうか。「生きる」という選択をすることができるだろうか。きっとどうすることもできず、泣き続けることしかできない、生きている価値などないと感じて一緒に死のうと考えるかもしれないと思った。佐藤さんが娘を亡くした時の悲しみや苦しみや辛さはきっと想像してもわからないくらいのものだと思う。それでも、この経験を未来に繋いでいこうと「生きる」選択をして私たちに自身の経験を伝えてくれたことは本当に感謝しかない。現在も行方不明者の遺族らは土を掘り起こして探し続けている。伝承館には、巴那ちゃんという当時大川小学校4年生で行方不明の女の子のランドセルと教科書、巴那ちゃん宛の両親の手紙が展示してあった。手紙の内容で「巴那の結婚式にはいろんなドレスも着せてあげたかった」「巴那の笑顔がみたい」「巴那に会いたい」涙が溢れた。

自分がどれだけ幸せか、巴那ちゃんの両親、遺族がどれだけ思いで探し続けているか、いろんな考えが浮かび、感情がぐちゃぐちゃになった。「救えなかった命を考える」立場は関係なく、震災を風化させないために目を背けたい話題だとしてもそこにしっかりと向き合っていくことが大切だと学んだ。また、大川小学校は悲劇の学校と言われているが、被災地になる前はごく普通の小学校だっ



た。特別じゃないところが突然変わってしまう、日常が突然奪われてしまう怖さを目の当たりにした。そして佐藤さんは「大川小学校は未来を拓く学校だ」と話していた。娘を亡くしてきっと苦しかったはずなのにどうしてこんなことを言えるのだろうと疑問に思った。でも娘の死を経験したからこそ、それを忘れてほしくない、忘れてはいけない、だから未来に繋いでいく未来を拓いていく学校であるからだと分かった。「いくら防災を頑張ったって人間の行動に結び付かなければ意味がない。」自分が今まで心のどこかで災害を他人事として捉えてしまっていたと気づくことが出来た。大切な人を想定して自分事として考えていくのが重要だと分かった。この大川小学校の経験から明訓に津波が来た際、どこに逃げるのがいいのかを全校生徒が把握する、避難訓練の見直しが必要だと感じた。そしてこの場所は絶対に日本人なら訪れるべきである。語り部さん一人一人に違う物語があるように被災者何千人、行方不明者何百人とニュースでは簡単に言われるがその一人一人に大切な人がいて、いろんな思い出があって、帰りを待っている家族や仲間がいることを私たちは決して忘れてはいけないと感じた。

2. 気仙沼向洋高校

次に向洋高校を訪れた。ここでは校舎の中に入ることが出来た。バラバラに散乱した教科書や資料、どこからか流れてきたであろう車、壁が剥がれて剥き出しになった鉄筋、本当にここに津波が来たのかと思うくらい周りがのどかであることとのギャップに衝撃を受けた。

今は向洋高校の前はゴルフ場になっているが、本当はここに町が、住宅が、人の声があったのだろうと想像して津波の恐ろしさを改めて感じた。また、屋上に行かないと津波に飲み込まれてしまうくらい波が高かったのは衝撃的だった。そして津波の被害を受けた教室には震災前の向洋高校の生徒の写真が展示されていた。明訓と何ら変わりのない生活がそこにあったことを知った。ここでは大川小学校とは異なり、生徒・教職員は全員無事だった。事前に津波が来たらどこに逃げるかをしっかり話し合っただけで把握しておくことの重要性を実感することが出来た。



3. 荒浜地区

次に荒浜地区を訪れた。車窓見学の予定だったが、実際に降りて辺りを散策した。本当に何もなかった。その現地にあったのは奇妙な形をした松の木と海と川と小学校だけ。ガイドさんなどはおらず、詳しい話を聞くことはできなかったが、震災前の写真と現地を見比べることで復興の難しさに気付いた。

まずなぜ松の木が奇妙な形になっているのか。上の方にしか枝葉がついていなかった。その理由は「津波で流されたから」だった。あんなところまで津波が来たんだと向洋高校と同じ気持ちになった。そして震災前は住宅地が川沿いに並び、一つの町ができていた。そこが全て荒地と化していた。静かに流れる川、静かに波を立てる海、これらが町を飲み込んだことは想像し難かった。こういった想像し難いところに関して、私は当時生きていたし、津波の映像等を通して若干のイメージは出来た。しかし、今後ますます東日本大震災を知らない世代が中心の社会へと移り変わっていく。その世代はきっと私よりもイメージすることは難しいだろう。震災の被害を風化させないためにどのように伝承させていくかが今後の課題だと感じた。



4. 名取市震災復興伝承館・閑上地区散策

次に訪れたのは閑上地区だ。ここは津波によってほぼ全てが無くなった地区であった。実際に現地を訪れてみると、大きなショッピングセンター、沢山の公園、住宅街があり、荒浜地区とは違い非常に発展していることに驚いた。伝承館を訪れ、職員さんの話を聞いた。「震災当時はアクシデントで防災無線が壊れ、パトカーで逃げろと言ひ回るしかなかった。」警察官の方はどれだけ焦りながら言ひ回っただろうと想像した。また、閑上には過去何度も津波が来ているのに、昔から「閑上は安全」「もう津波は来ない」と信じられていた。思い込み、信じ込みでお年寄りがなかなか避難せず、それを役員の方が説得しているところに津波が来て流されてしまったという。これには正常性バイアスも働いていたのかもしれないと思った。現在、SNSを通じて災害時にデマ情報が流れることがとても多い。情報を自分から集め、どれが本当でどれが嘘か自分で判断する能力が求められてきていると学んだ。そして職員さんは「とにかく逃げることを大切にしてほしい」とおっしゃっていた。自分は逃げる事ができる、高校生だし、体力だってある、亀田には津波来ないし。と今まで思っていた。でも「ベッドの近くに靴は用意してますか？」と聞かれた瞬間、自分は大丈夫だと思い込んでいたことに気づかされた。もし大地震で棚が崩れ、身動きが取れなくなったらどうしよう、ガラスが割れて足元が危険になっていたらどうしよう、液状化現象で家が半壊したらどうしよう。そういったことを考えるきっかけとなった。ハザードマップが全てじゃない。情報を鵜呑みにしてはいけない。そう心に誓うことができた。

閑上地区ではお昼ご飯もいただいた。地域の方々が「高校生ですか？」とか「いつも言わないけどおかわりあるから食べたかったら言ってね」と優しく声をかけてくれた。心が温かくなった。この優しく声をかけてくださった人の震災を経験し、それを乗り越え、前を向いて仕事をする姿に胸を打たれた。きっと震災の時に支え合って復興を目指してここまで頑張ってきたんだろうな、と想像した。大切な人を亡くして後ろ向きになってしまうのに前を向いて笑顔で優しく声をかけてくれる、そんな姿から自分は1人で生きられない、沢山の人の

に支えられて生かさせてもらっているんだと再確認することができた。復興への情熱と人の温かさに感激し、心から尊敬したいと思った。

5. 東日本大震災・原子力災害伝承館

ここからは福島へ移動し、原子力発電所事故のことについて詳しく学んだ。世界でも類を見ない複合災害が東日本大震災で起こり、現在も放射性物質の影響で立ち入り禁止区域がある。今回訪れた場所もちっと前までは立ち入り禁止区域だったことに驚いた。原子力災害に関して、そんなに身近ではなく、正直知らないことが多かった。しかし、今回語り部の宗像さんの講話を聞いて原子力災害がどのようなものだったのか少し知ることができた。

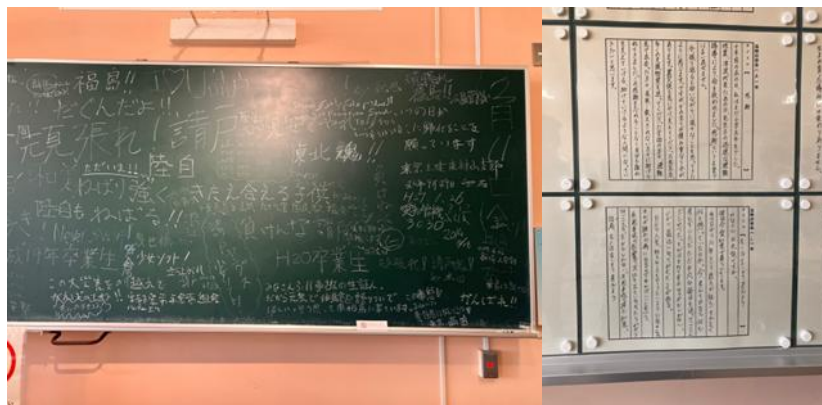
宗像さんは当時中学 1 年生で富岡町に住んでいた。原発事故は震災の影響で通信が途絶え、被災者は情報が入らない状況だった。そのため、避難指示が出てもみんなすぐに帰れると思っていた。しかし、放射性物質の影響で帰ることができたのは 6 年後の 2017 年。その間、富岡町には野生動物が蔓延り、無法地帯と化していた。一時帰宅ができた際は、帰れる喜びと震災でボロボロになった家を見る絶望で複雑な心境だったという。自分がもし同じ立場だったらどうだろうと考えた。多分同じところに住み続けることはしないと思った。戻ってくることはできないと思った。でも宗像さんは今も福島に残り続けている。震災で失ってしまった故郷に、原発事故の問題に、目を背けることなく自身の故郷を再建しようという熱い想いを持っていてかっこいいなと思った。でもきっと宗像さん 1 人では挫折していたと思う。同じ思いを持った人が周りにいたからこそ、人とのつながりがあってこそだと感じた。原発事故が壊したものは大切なもの、人とのつながりであり、災害から前を向けたのも人とのつながりだと宗像さんは話していた。本当にその通りだと思った。どの被災地に行っても人と支え合ったからこそ今があると実感した。災害を自分ごととして捉える、そして備え以上のことはできない。被災地巡検をする中でここでは自分だったらと考えることができ、成長を感じた。しかし、備えに関しては実際に行動に移せていない部分があると感じているため、家に帰ったら早速家族で防災についてもっと積極的に行動しようと思った。

6. 浪江町立請戸小学校

最後に訪れたのは浪江町立請戸小学校だ。ここではこの小学校を、福島を、東北を思う人々の気持ちに触れることができたと感じている。校内の蛇口が本来あり得ない方向に曲がっていたり、体育館のステージには「祝 修・卒業証書授与式」と書かれた看板があったりと、あの震災で時が止まってしまっているんだなと感じた。2 階は被害が少なく、沢山の資料や映像が展示されていた。2 階へ上がる階段には一段ずつ英語の数字が書かれてあり、ああここはつい 15 年前まではいろんな声で溢れた小学校だったんだなと実感して震災は日常全てを一変させたんだと津波の怖さを改めて感じた。2 階にはここを訪れた人々が書いたメッセージがあった。全てを見ることはできなかったが、私は一つずつ丁寧に見て回った。「頑張れ福島！！」「東北魂！！」「ここに来ることができて良かったです」中には海外から

訪れた人のメッセージもあった。人々の温かいメッセージを読んでいるうちに涙が溢れた。そして当時の請戸小学校の子どもたちが書いたメッセージもあった。

「自分の人生、好きなことをやりたいように生きる、それが誰かのためになればいいと思う」私はこの言葉が読んでいく中で一番印象に残っている。原発事故があって悔しい思いややるせない思いに囚われるのではなくて、逆に何を得ることができたか。そこに目を向けてみる、視点を変えてみるという発想も大事だと学んだ。



7. 被災地巡検全体を通して

私が被災地巡検で最も多く感じたことは「支え合うことの大切さ」である。震災が起こってしまうことは私たちには制御できないことであり、いつか必ず起こってしまう。でも災害が起こる前、事前に準備することはできる。話し合っただけで逃げる場所を決めておくことはできる。災害が起こった後でも、人と支え合いながら前を向いて再び仕事を続けることができる。そこまでどんなに辛い思いをしたとしても「生きる」という選択をすることができる。人は1人だったらうまくいかない。最初は良かったとしても最後までやり切ることは難しいと思う。自分は誰かを支えていて、多くの誰かに支えられて生きているという実感を常に感じて誰かを支えるような、助けられるような行動をしていきたい。防災に関しても、大切な人がいる今この瞬間を守り抜くために一歩ずつ備えを続けていきたい。私の大好きな明訓を守るために、友達や先生を守るために、希望の防災を積極的に実行していきたい。